

2026年4月16日発行

事務所 武石地域総合センター内

TEL:0268-85-2511

<https://www.s-takeshi.jp>

印刷 中澤印刷株式会社



なぎなた振り



けん玉



こま回し

武石っ子まんなか交流会

～みんなで楽しもう世代を超えて～

2月4日(水)、つくる会子育て教育文化部会は、「武石っ子まんなか交流会」を開催しました。会場となった武石地域総合センターコミュニティホールには、武石保育園の年中・年長園児25人を中心に保護者や地域住民、部会員など約60人が参加して、世代を超えた楽しい交流会が行われました。

前半は、御柱おねり行列で演じられているなぎなたの振りや掛け声を、園児たちが自分で作ったなぎなたを持って体験しました。

部会員でおねり行列の中長刀を経験された中原健一朗さんと品川晃輔さんが先生となって、まずは2人で演技を行いました。大きな掛け声と躍動的な動きに園児たちはびっくりしていましたが、先生の動きを見ながら一緒になぎなた振りを行いました。

後半は園児たちが、4つのグループに分かれて竹とんぼ、輪投げ、けん玉、こま回しの昔遊びをしました。各々のグループでは部会員や大人たちが園児たちに遊び方を教えながらいっしょに昔遊びを楽しみました。

つくる会の児玉会長からは、「みんなで遊んでください」と園児全員分の竹とんぼが贈られました。

子育て教育文化部会長の小林慎一さんは、「今日は楽しく大人と子どもの交流ができて良かったです。3年後に御柱のおねり行列が行われ、今日と同じなぎなた振りがありますので、みんなで見ましょう」と終わりの言葉をかけると、園児たちは「はい！」と大きな声で返事をしていました。

**武石の地域づくりを考える
長野大学松下ゼミ 活動報告&意見交換会**

1月25日(日)武石地域総合センターにて、長野大学松下ゼミによる「武石の地域づくりを考える 活動報告&意見交換会」が開催され、ゼミ大学生および地域住民など約50人が参加しました。

まず、2025年度に松下ゼミが地域住民とともに取り組んだ3つのテーマ、①古民家「たまり家」の再生活動、②ピザ窯小屋「ぴざらぼ」運営を通じたコミュニティ拠点づくり、③巢栗溪谷の自然を活かした地域づくり、について各チームから活動報告があり、活動の中から出てきた課題やそれらを解決するための提案などの説明がありました。

その後、ゼミ大学生と参加住民はテーマ別に分かれて、質疑応答や意見交換を行いました。



2月のお弁当販売 三色彩りおから弁当

2月のお弁当は、「三色彩りおから弁当」でした。タマゴ、野沢菜、桜でんぶの三色に彩られたご飯に、おからと肉団子、ほうれん草とツナのあえ物が付いた食欲をそそるお弁当となりました。



2月26日(木)70食を販売、完売となりました。

3月は「春の寿司弁当」を販売しました。

住みよい武石をつくる会 産業経済部会

松下ゼミのこうした取組みは4期目となり、活動内容も実績を重ね、課題や提案なども具体的で、より深い内容になってきています。意見交換においては、大学生と地域住民との真剣なやりとりが聞こえてきました。

地域づくりを学ぶ若い人たちの視点やアイデアが武石地域の活性化につながることを願います。

**武石温泉 うつくしの湯
リニューアルオープン**



3月1日(日)、武石温泉うつくしの湯がリニューアルオープンしました。

開館の10時前にはオープンを待ちかねたお客さんなど約30人が集まり、開館と同時に足早にお風呂場へと向かいました。開館後約30分で約150人が訪れ、駐車場も満杯と

なりました。

なりました。

今回の改修工事では玄関付近の地盤改良やボイラー設備の更新などの他に、食堂の配膳窓口を大広間側にも設置、カラオケ室と小広間を一体化して50人程度でも使用できるように改修、大広間の畳表替え、ロビーのカーペット張り替え、食堂新メニューの追加など、より使いやすく、より快適な空間となる改修が行われました。



**「コミュニケーションアプリ『キクもん』」
説明会を開催 3月4日(水)**

武石防災協議会では、災害時における複層的な情報伝達手段を考え、今後の地域防災システムの構築に向けて検討していく上で、今回、真田地域のデジタル地域コミュニケーションアプリ「キクもん」の活用状況について、説明会を開催しました。

武石地域の情報伝達手段については、平成30年1月から無線電波を使用した音声による放送システム「武石エリアトーク」により地域情報などを配信しています。しかし、加入率の維持や多様

なニーズへの対応により、今後はデジタル技術の活用が必須となってきます。

つくる会では、現状の「武石エリアトーク」の運営を継続しつつ、新しいシステムの研究や動向に注視をしております。



堰（農業用水）と開発Ⅰ

郷土史家 見玉卓文

令和7年9月1日付信濃毎日新聞の全面広告欄で、武石を会場にしてJ A長野県青年部協議会が生産基盤強化について意見交換会を行った様子が報道され、農業を継続する上で、「劣化が目立つ水路」が課題の一つにあげられていました。

信州では用水路（堰）を「せぎ」と言います。他県の人には通じません。武石の周辺には「八重原堰」など、開削者や開削時期などの記録が遺る有名な「堰」がありますが、武石の「大堰」・「沖堰」などは、開削者も時期も不明です。市の瀬・堀の内の水田を灌漑する堰は、上堰、市之瀬堰など呼び名も固定していません。しかし、開削者などの記録が残るのはほとんど江戸時代からですから、武石の堰には江戸期以前の開削の歴史があるとも言えます。

上堰は市之瀬の西の端岩の口で武石川から取水して、段丘崖を開削した水路を流して間もなく段丘上に載り、しばらく段丘縁を流れて常滑沢・道楽沢の扇状地末端で分岐し、一方は扇状地末端ラインを巻くように微高地を横断して再び分岐し、田用水として十二沢などの扇状地末端をなぞりながら、一方は真っ直ぐ微高地の北縁を下って、開戸から駕籠田・大布毛・十二宮・片羽などのやや低い地帯を灌漑して藤沢に合流しています。最初に分岐した一方は微高地の上面に乗って、市之瀬・堀の内・片羽などの生活用水ともなっています。

堀之内の集落内には、微高地の北側と南側を流れる堰に抱えられるようにして石罫で囲われた館跡があります。櫻井松夫さんは、館の主を下総（千葉県）を本拠とした千葉氏一族の武石氏とし、鎌倉時代初め頃に武石に入り、堰を開削して上武石を開発したと考えました。（『武石村誌』162～175ページ）

上堰の末端が藤沢に落とされて権兵衛川の水量が増えたので、小山の辺りまで流路沿いに開田が進んだと思われますが十分ではありませんでした。新たに大堰を開削して権兵衛川の水量を増し、宮の前から新井沖までの広い地域を開発したのは、小学校体育館・児童館の地に「大和守屋敷」と呼ばれる館城を構えたと伝承される人物です。

鎌倉幕府が滅んだ後の南北朝期の初め、武石氏

は本家の千葉氏とともに反足利尊氏方でした。ですから尊氏の勢力が拡大すれば、武石氏は生き残れたとしても、所領は没収、あるいは削減されたと思われます。

では、大堰を開削したのは誰なのでしょう。

足利氏に属して忠節を尽くし勢力を拡大した氏族に甲斐（山梨県）の武田氏があります。櫻井松夫さんは、武田氏がいただいた恩賞に依田窪南部地域があり、一族の大井氏が派遣されて武石の経営にあったとし、半未開であった下武石地域を開発するため大堰を開削し、用水が台地上がった要に館城を構えて堀とし、町用水と田用水を分岐しつつ権兵衛川への給水を図ったと考えました。この時、千葉氏流の武石氏と直属の人々は上武石の田畑・屋敷の明け渡しを要求され、堰末端の半未開の沖・鳥屋地区へ追いやられたと考えました。（『武石村誌』175～183、191～195ページ）

子檀嶺神社本殿の一段下の削平地に笹焼社という小さな社があり、笹焼神・平胤盛霊神・大井信廣霊神の三神が祀られています。この小祠は沖の小山東麓の諏訪社境内にあり、明治27年に移転したのですが、長野県知事あて「神社移転願」文書中に、「社ノ祭神、笹焼神ハ武石村開拓ノ祖、笹八木庄司ト称セシ人ナリ」とあります。（『上田市公文書館旧村行政文書』）

小山の東麓では、笹焼社は武石谷に背を向けることとなります。「武石村開拓の祖」としては向きが変です。小山真夫さんが集めた民話集の「牛石」の伝承では、牛に乗って来た神様は、川辺の葭と丘辺の笹を焼いて沖の平を農地に開いたとあります。「武石村開拓」は「沖の開拓」と理解するのがよいと思われます。



子檀嶺神社の境内に祀られる笹焼社

武石の人・団体

武石を盛り上げる
一ツ紹介
人やグループ



農業をしながら東洋の美を追求する
きのした
木下 文雄さん (下武石薮合)

武石地域総合センター1階ホワイエの壁に一枚の油絵が掛かっていて、時折り掛け換わっていることをご存じでしょうか？

これらの油絵は何れも下武石薮合の木下文雄さんが描いたもので、季節に合わせて新しい作品や絵画展で受賞した作品などを順次掛け換えています。

伊那市高遠町の自然や風景をテーマに、2000年(平成12)から3年に一度開催された「信州高遠の四季展」では、秀作賞を3回受賞しました(写真1、写真2、及び他1点)。(本絵画展は、第6回を最後に休止しています)

小山敬三記念小諸公募展は1987年(昭和62)から毎年開催される絵画展で、第3回ごろから作品を出して、約35年間応募を続けているとのこと。昨年の第39回では「初冬の浅間山麓」(写真3)が小山敬三美術館友の会奨励賞を受賞しました。この公募展では、浅間山、千曲川、小諸の風景などを描いた絵画を全国から募るもので、木下さんは浅間山をよく描いているそうです。

「絵は写真と違って景色を忠実に再現するのではなく、景色から感じる物を絵の中に表現する想像の産物です。良い絵は、絵の額縁から外れた所の様子まで見えて来たり、心に訴えるものが感じられるものです」と絵の奥深さを教えていただきました。

「画家にとって油彩画の長所は、何度も色を塗り重ねることができることです。少しずつ描きながら絵の具が乾くまでに、さまざまな構想を練る時間がとても楽しい。」と話してくれました。

「スポーツやカラオケもやりますが、年を取ると体は動かないし声も出なくなります。でも絵は続けられます。要はボケ防止ですよ。これからも生涯現役で絵を描き続けます」と木下さんは語っています。



2月中旬より
揭示中の油絵

絵は仕事の合間に少しずつ描いているとのことですが、春から秋にかけては農作業で野菜やお米などを直売所に出荷するのが忙しく、本格的に描くのは冬の期間とのこと。

小学生のころから絵を描くのが好きで、絵画展などにも応募していましたが、新制武石中学校1年の時に美術の先生に赴任していた橋詰英一郎先生との出会いが、絵への想いを深めるきっかけとなりました。(橋詰英一郎先生は武石の権現出身で、フランス絵画界の巨匠マチスの孫弟子に当たる方です。)

高校卒業時(1961年)には東京芸大を受験しましたが、一、その後の人生は紆余曲折。しかし、この間も絵に対する憧れと情熱が絶えることはなく、絵の制作や絵画展への出品を続けてきたそうです。



第3回 信州高遠の四季展(写真1)

秀作賞
「千代田湖畔にて」F20



第4回 信州高遠の四季展(写真2)

秀作賞
「古城の老木」F20



(写真3)

小山敬三美術館友の会奨励賞
初冬の浅間山麓
木下 文雄 上田市